

第8回 東アジア・中央アジア、第12回 西アジア 合同分科会 議事録

開催日時：2010年1月21日（木）15：00～17：00

場 所：東京文化財研究所 第一会議室

出席者（敬称略）：青木繁夫、西谷正（以上、東・中央アジア分科会委員）、前田耕作、上岡弘二、入澤崇（以上、西アジア分科会委員）、今津節生（九州国立博物館）、林如子（JICA）、宇津山祥子（外務省）、豊田昌一（国際交流基金）
清水真一、友田正彦、二神葉子（以上、東京文化財研究所）、田代亜紀子、原田怜、原本知実、小角由子、土居香奈子（以上、コンソーシアム事務局）

1、中国内蒙古自治区吐爾基山遼墓（トルキサンリョウボ）彩色木棺保存への協力

今津節生（九州国立博物館）

トルキサンの遼時代の墓にある彩色木棺の発掘と保存について報告する。トルキサン遼墓は、2003年に土砂を採取していた際に発見され未盗掘の状態が発掘が開始された遺跡である。内蒙古自治区文物考古研究所では住友財団の研究助成を得て九州博物館と協力し、2007年から2010年の予定で彩色木棺の保存と科学的調査を実施している。発掘された古墳内部には壁画があり、その欠落した一部は内蒙古自治区の研究所で保存されている。遼墓は遺体を入れた内棺と外棺からなる構造で、これに乗せる棺台が備わる。築造は西暦920年頃の遼時代初期と考えられている。木棺内の遺体は皇族級の人物だと思われ、その他にも多くの遺物が確認されるなど2003年の中国の大発見の一つに数えられている。内蒙古自治区は寒冷地であり、木棺内は密封状態のまま湿度が非常に高い状態に保たれるため、木は腐らずに木材が水に浸かって酸欠状態となった水浸木材に近い状態で残っていた。内蒙古ではこうした事例が多く、発掘後放置すると水分が放散され木材が収縮するため今後の木材保存に引き続き大きな課題となる。遼墓の被葬者は若い女性で人骨と黒髪が残っており、また金製品や銀製品の非常に緻密な細工の副葬品が見つかった。これら装飾品の数々は国家一級遺品として指定されている。

現地への派遣は2003年からになるが、九州国立博物館からは2006年に内蒙古に協力している。協力理由は日本の文化を外から見るためである。遼は日本の平安時代にあたり、渤海まで領土を拡大していたので日本との関係が想像されるが、従来、日本文化における遼の位置付けは乏しかったため、九博として取り組む課題であるとした。木棺への協力は内蒙古側から、発掘した木棺の保存処理についての要望があった。木棺はわれわれが最初に訪れた2007年までは、シートをかけてゆっくりと自然乾燥させた状況だったが、長時間の経過により全体に埃をかぶり、当初の際立った明るい色は減退している状態だった。内蒙古は寒く乾燥する場所なので、木棺遺物は非常に乾燥していた。作業としてはこの木棺の表面に様々な色で彩色を行い、金箔をはりつけた。木棺は非常に豪華なものなのでまず状態調査を行ったが、この作業には最初から内蒙古の人と共同で行ったことが我々の調査

の特徴である。調査には最新携帯型の機材を持ち込み、三次元計測や赤外線分析を実施した。現状では内蒙古にこうした機材はないが、中国は経済的に発展に伴い、彼らも近い将来導入することを念頭に置いた上での調査とした。

実際の色彩木棺の保存処理調査は、まず内棺外面に浮いている金箔を取る防腐的な処求め、技術者を派遣していただいた。処置は、中国側と共同で、膠とカルボキシメチルセコース（CMC）を用いて軽く金箔をはがしていった。当地域は黄砂が非常に激しいため、塵が積もりやすいので全体のクリーニングも行った。その後は表面に残った顔料を上から押え、剥離箇所の剥落止めを行った。これは中国で比較的入手が容易なパラノイド B72 という世界的に普及しているアクリル樹脂を使いながら行った。彩色濃度については、現地の人にとっては発見された当初のイメージが強く残っており乾いた感じよりは湿ったイメージが強いようであるため、濃度は相談しながら調整した。

木材に接した鍍金表面の緑青除去作業として、木材と木材をつなぐための銅製の釘は表面に金メッキがしてあり、その塗金の錆を落としていく作業が必要であった。そのために、彩色部分を保護し、錆を取る表面のみを出して、そこに中国で使用実績のある錆取剤をしみこませた高吸水性樹脂を金属の表面に貼って錆を除去した。この作業を何度も繰り返した後、刷毛に水を含ませて薬品を洗い流した。その後、金箔を樹脂で止め、その上に和紙を張り、固定した後に和紙をはがした。そして最後に樹脂をとって全体を仕上げるという工程で進めた。

以上の作業は 2007 年、2008 年、2009 年の年 3 回、主に夏季に 1 週間程度行った。現地の方々と一緒に、まずは外棺、次の年は内棺、そして棺台という形で作業を進めている。作業は滞在する 1 週間では終わらないが、その後は方針に沿って現地の方が作業を継続する。今年は 3 年目に入り、棺台に着手している。これは一番地面に近い場所にある部分なので、状態はよくない。朽ち果てているものや乾燥してひびが入っているものもあるが、三次元計測をして、その複雑な構造を明らかにしようと考えている。この棺台は内蒙古自治区の博物館に献上し、中国国内に展示する可能性がある。一週間の作業を終えた時に、常に現地のスタッフに今回はどのような作業をしたのかを説明し、全員で共通理解を図る方向でやってきた。本事業は、現地で材料を全て用意でき、現地の人々が得た技術で継続可能であることを目標とする日中の共同作業を通じた相互協力を行っている。また、この木棺は 2011 年に九州国立博物館での特別展示開催を皮切りに、日本国内の 3~4 館で巡回展示を開催する計画が進んでいる。今回の事業は文化財の保存というところから技術協力、信頼関係を築き、将来的にはわれわれが手を引いた後もその技術が使われ、受けつがれることを目標にしている。また、住友財団の助成による事業であるが、将来的には中国の皆さんにも日本の皆さんにも展示という形でお見せできればと考えている。

・今後の国際協力の方向性としてどのようなものが考えられるか

—博物館として、アジアの一員としてアジアとの国際協力を行うということで、今ま

では援助という形であったが、これからは保存という切り口によって、より信頼関係を得られやすいと考えている。九博では、博物館科学という分野で、文化財保存あるいは博物館科学を一つの切り口としながら、アジア各地の協力関係を結んでいこうという方針である。また、それを展示という見える形にすることが、博物館科学では可能であるといえる。(今津)

・九博の研修生受け入れはどのようになっているのか

一研修生を広く国外から受け入れたいとは考えているが、現在は中国からの研修生を短期で受け入れている状況である。長期に関しては予算の問題がある。タイなどからも長期受け入れの要望がある。こういった保存科学、科学的要素をもった人員配置が実は外国では当たり前なのだが日本ではあまり進んでいない。

保存科学を博物館の中のものを守るために使うというのも大切だが、むしろ保存科学を道具にして、外部との交流を進めていくという考え方を積極的にとらえることも必要である。博物館が、博物館の中でも外でも保存ということを活かせるようにしていきたい。(今津)

・研修で来るのは考古学研究所の人か

一内蒙古では大きな組織として文物考古研究所と内蒙古博物館がある。ところが現在は、文物考古研究所の所長が内蒙古博物館の館長を兼ねている状況である。そのため、普通は他所の組織だとライバル意識があったりするが、ここは一体だったため文物を数多く所有する考古研究所と最初に協力し、その後展示する大規模な施設として博物館とも交流を進めることが可能であった。また、他の国ではこうした保存にはなかなか外国人、つまり日本人には手をつけさせてくれないところがほとんどだが、この点についても我々は最初からほぼ一体で作業を進めていたので、そのあたりも珍しいプロジェクトであるといえる。また、自治区であるため中国国内の他の地区とは違い、自治区の判断が優先されるという良い点がある。(今津)

・中国で外国人が文化遺産に触らせてもらうのは難しい。よく保存作業を実施できると思う。

一最初に協力するといつて入ったときは、一枚の写真を撮るにしても許可が必要であった。しかしわれわれが苦勞して作業しているのを見て、後から、写真は撮ってもよいが、中国側が取ったということにするよう言われた。しかしその後、雪が解けるようにだんだんと協力的になっていった。最初は厳しい状況であった。(今津)

・韓国はかなり関心を示しているのではないか。

ー工業製品については中国の雲水、織物についてはドイツが指導している。これらはいろいろと連携しながら行っているが、韓国は韓国だけで行う。(今津)

ー韓国は中国から随分拒否反応があるのではと思う。背景には渤海問題があるだろう。おそらく韓国はもう拒否反応があって、彼らで関与できないのではないか。

・木棺はずいぶん状態が良いようだが、木棺全体に漆など特殊なコーティングがしてあったのか。

ー漆などが使用されているかと思い慎重に観察したが、それは見られなかった。おそらく冷たい中で、湿度が 100 パーセントの状況で長期間置かれていたことが要因ではないかと思う。

・壁画に関してはどうか

ー当初は九博としては壁画の協力が視野にあった。しかし想定していた慶稜の壁画は盗難を受けた後で、非常に嚴重に閉ざしてしまっていて、難しかった。

2、モンゴル カラコルム博物館建設計画

林如子（国際協力機構）

モンゴルのカラコルム博物館建設計画について報告する。モンゴルは中国とロシアに国境を接し、日本の 4 倍の国土を持ち、人口は 270 万人が暮らす。首都のウランバートル市には、人口の半分近い 103 万人が暮らしており、人口集中が問題になっている。モンゴルは家畜数が多く、4300 万頭にも上っている。今年のモンゴルは寒さが厳しく、マイナス 40 度になるのではないかといわれていて、すでに 80 万頭ほどの家畜が死亡しているが今後さらに被害は拡大するのではないかという状況にある。モンゴルは地下資源、銅や金など資源が豊富な国なので、今後急激に歳入が増加する見込みである。モンゴルの国としての開発の課題は首都への人口集中であり、遊牧民の暮らすゲルなどがウランバートル周辺に集中し、ゲル地区が広がる。そこには当然水や電気等のインフラ設備が整ってない。また、モンゴルは豊富な地下資源に依存する傾向があり、製造業などが発達していないという問題がある。モンゴルは極めて親日的な国として知られ、日本との交流としては大相撲等があり、モンゴルでも相撲の視聴率が高いということである。

モンゴルへの JICA による支援については、労働支援は外務省策定の対モンゴル援助計画に基づいて 4 つの重点分野で実施されている。1 番目は市場経済に伴う制度整備、人材

育成に対する支援がある。代表的なプロジェクトとしては初等教育施設整備計画などが挙げられる。2番目は地方開発支援ということで、地方開発拠点を中心とした特定の地域を対象とした支援として、牧畜や放牧業を中心とした支援に取り組んでいる。3番目は環境保全のための支援として、自然資源の適正利用やウランバートル市の環境対策にも取り組んでいる。4番目には経済活動促進のためのインフラ整備支援があり、ウランバートル市の都市計画などを行っている。

次にカラコルム都市遺跡について説明する。モンゴル帝国の首都カラコルム都市遺跡は、ウランバートルの南西 350km カラコルム市オルホン渓谷という場所に位置する。ここは世界の文物や民族が集まる国際都市であったということで、マルコ・ポーロ等ヨーロッパからの客が来訪している。この都市遺跡の起源は 1220 年のモンゴル帝国初代皇帝チンギス・ハーンが築いた兵隊基地であるとされている。そして 1235 年に 2 代皇帝オゴタイ・ハーンが都を建設したとされる。その後 1384 年頃明に破壊された。1586 年にはモンゴル最大のチベット仏教エルデニゾー寺院が建立される。このときカラコルムの建設資材は再利用されたため、以前の都市の正確な位置すら分からなくなっており、現在都市の遺跡はほとんど消滅している。したがって将来の修復のためには、綿密に練られた考古学的調査が必要とされている。現在は屋根瓦を制作した窯跡を中心に、1000 点が出土している。また、2004 年にカラコルム都市遺跡を含むオルホン渓谷がユネスコの世界遺産登録に登録された。それにより遺跡の保護、調査、公開、拠点の整備が緊急の課題となっている。

カラコルム都市遺跡において行われる合同調査について紹介すると、1948 年から 49 年にかけてソ連とモンゴルの合同調査が、1995 年から 98 年のモンゴルと日本の合同調査、そして 1999 年からはモンゴル科学アカデミーとドイツのボン大学が行っており、発掘された遺跡の一部はモンゴル科学アカデミーの研究所内に展示されている。しかし、その出土品の多くはボン大学管理下で近くの車庫に保管されるなど、劣悪な環境下におかれている。モンゴルは冬になるとマイナス 30 度から 40 度という厳しい環境であり、遺物も劣化や損傷が懸念されている。また、2004 年に世界遺産に登録されたこともあり、歴史博物館建設の必要性が高まった。こうした背景の中で、モンゴル政府より要請があったことで、建設計画を実施することになった。モンゴル側からの要請は、博物館の建設および展示や修復機材の調達であり、モンゴル側の実施期間は教育文化省文化芸術局である。協力サイトはウブスハンガイ県ハラホリン市で供与額は 5 億円（うち建設費は 4 億円）。博物館はエルデニゾー寺院に隣接する形で建設が計画されている。建設予定地はユネスコの日本信託基金により設定された遺構保存地区の対象外に位置する。モンゴル科学アカデミーが実施した調査では、この位置に保護すべき遺構が存在しないということが判明している。また、周囲には視界をさえぎる物が何もない草原の中にあるため、全周囲からの外観を意識した景観になっている。観光客が多いカラコルム遺跡やエルデニゾー側からは目につきにくい位置に配置した。博物館は平屋で床面積は 1500 m²になっ

ている。内部は常設展示室と企画展示室があり、常設展示室にはカラコルムのモンゴル帝国時代を中心とした歴史的変遷を概観できる展示、またリピーターを獲得するためにいろいろな企画をする企画展示室で外国の貴重な文化財を展示することが計画されている。そこは博物館のガイダンス、展示、研修、会議、企画展などに利用する予定の多目的ホール、収蔵庫、研究修復室等が入る予定である。プロジェクトは現在建設工事の途中であり、2010年3月には付帯工事が完成予定。その4ヶ月後の7月上旬には外装内装設備の取り付け等が完成する予定。

この事業で期待される成果としては、今までなされていなかった都市遺跡の遺物が保存、展示されることが挙げられる。またこの博物館は開館以降2万人から3万人の来館者が見込まれているが、博物館が発掘現場における文化遺産保存修復活動の拠点となること、多目的ホールでの公演、展示室での遺物の展示を通じて多くの周辺住民の遺跡保存に対する考古学的関心ひいては伝統文化遺産に対する関心の向上に大きく貢献することが考えられる。また、博物館運営を通じて、管理運営や人的資源の強化も期待される。これらのことを通じてモンゴルの文化遺産保護の発展に寄与することが期待される。また、日本との関わりとしては、博物館の建設によって観光客の増加が見込めて、日本との交流がさらに深まることが期待されている。

・ 地元のハラホリン大学が文化財保存のウランバートルの文化遺産センターと協力して文化財保存の学部を作ろうとしていると聞いているが、彼らと連携するといった話はあるのか。また、展示品についてはドイツと話し合っただけで展示品の計画は具体的に進んでいるのか。また、ジオラマをつくる計画などはあるのか。

ー 本事業と地元大学の連携については現時点では把握していないが、今後協力の可能性もあると考えている。出土した遺物をどのようにするかというドイツとの話し合いや、ジオラマを作る計画については現時点では承知していない。(林)

・ 去年の段階では今年の7月ぐらいのオープンを予定していたと思うが

ー 現在少し工事が遅れており、完成が当初予定よりも後ろ倒しになる見込み。(林)

・ JICA は基本的に箱ものを提供しているだけという風に言われる局面があるが、博物館などの要請があった時に問題をコンソーシアムに対して投げかけて判断の材料にするだけでも変わってくるのではないかと思う。

ー 今後も国内外の専門家の方々の知見・支援をいただきながら、効果的な支援を行っていきたいと思う。

3、文化遺産国際協カコンソーシアムの今後の計画について

コンソーシアム事務局

<委員の改選について>

各分科会委員の任期が1期2年。第一期と第二期に関しては一律全員再任した。今回は4月に第三期の再選がある。規約によると、まず4月に新しい運営委員会のメンバーが改選され、そこで会長が互選により選任され、併せて会長が副会長を指名する。そして各分科会の会長が会長の指名により選任され、各分科会のメンバーは分科会長が会長と協議し選任する流れになる。そのためまず運営委員会のメンバーについて検討する必要がある。メンバーに関して意見などあればいただきたい。

<シンポジウムについて>

前回の企画分科会で平山先生の追悼シンポジウムをなるべく早い時期に行ってはどうだろうという話が出たので、その方向で計画している。

4、その他

・アフガニスタンについてだが、今後の支援については日本政府に対してコンソーシアムの存在をきちんと認識してもらい、進めていく必要があるのではないか。アフガニスタンはバーミヤーンとカブールに重点を置いた文化支援というものをどのように視野に入れていくかということが、政治支援を効果的にするという意見書は出した。(前田)

以上